
第五次受験戦争

剛力鉄板

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第五次受験戦争

【Nコード】

N8666U

【作者名】

剛力鉄板

【あらすじ】

合格した者は、あらゆる夢を実現できるといふ伝説の大学。

七人の受験生^{マスター}たちは、大学の受験合格を実現させるため、召喚した家庭教師と共に勉強し、自らの学力を証明する。
サヴァント

今また、新たな受験戦争の火蓋が切って落とされた！

ぶろろーぐ（前書き）

お久しぶりです、剛力鉄板です。

実に四ヶ月ぶりくらいの更新だと思います。

この投稿と同時期に、もう一つFateの小説を投稿するので、
よければそちらにも目を通してください。

ぶろろーぐ

——気が付けば、赤点だらけだった。

張ったヤマが外れたのだろう。

返ってきた答案は一面赤線が引かれていて、漫画で見るテスト用紙のようだった。

テストが返却された頃、自信はなくなっていた。

あれほど自信のあった国語は落ちてて、それ以外もほとんどが崩壊していた。

……その中で、受かっているのが家庭科・技術だけ、というのは不思議な気分だった。

テストの中で、受かっているのは家庭科・技術だけ。

よほど運が良かったのか、それとも日ごろの授業態度が良かったのか。

どちらかは判らないけれど、ともかく、家庭科・技術だけ受かっていた。

受かっているからには受かり続けなきゃ、と思った。

いつまでも受かっているとは限らないからと、とにかく勉強をし

た。

他の落ちている教科のように、赤点になるのがイヤだった訳じゃない。

……きっと、ああはなりたくない、という気持ちより。

もっと強い気持ちで、心がくられていたからだろう。

それでも、希望なんて持たなかった。

これだけ受かっていた事が不思議だったのだから、このまま受け続けるなんて思えなかった。

まず受かり続けない。

何をしたらって、この赤点から上がるまい。

幼い子供がそう理解できるほど、それは、絶対的な地獄だった。

そして落ちた。

暗記できなかったのか、暗記できるだけの機能がすでに失われていたのか。

とにかく落ちて、返ってきた答案を見つめていた。

まわりには赤点になって、自分が丸めてしまった答案たちの姿がある。

友人がやって来て、じき家庭科・技術が返ってくるのだと教えてくれた。

……それならいい。家庭科・技術が返ってくれば、テンションがあがる。

帰宅途中、公園で答案を見つめた。

自信もないくせに、ただ、悔しいなあ、と。

もう落ちている答案答案用紙を見つめて、素直な気持ちを口にした。

「——っ」

返ってきたテストがほぼ赤点。

子供心に、『しおり』がどうなるのかな、と不安に思っていた時、そいつはひょっこりやってきた。

しわくちやの背広にボサボサの頭。

俺のいる孤児院のおばさんよりちょっとだけ若そうなそいつは、お父さんというよりお兄さんという感じだ。

「こんにちわ、君が士郎くんだね」

白い陽射しにとけ込むような笑顔。

それはたまらなく胡散臭くて、とんでもなく優しい声だったと思う。

「率直に訊くけど、そこらへんの塾に入ると、初めて会ったおじさんに教えられるの、君はどっちがいいかな」

そいつは自分に勉強を教えてもいい、と言う。

講師なのか、と訊いてみれば、紛れもなく一般人だよ、なんて返答した。

……それは、とにかくうだつのあがない、頼りなさそうなヤツだった。

けど、塾とそいつ、どっちも勉強を教えるトコに変わりはない。

それなら、とそいつのところに行こうと決めた。

「そうか、よかった。なら早く身支度をすませよう。新しい家に、一日でも早く慣れなくっちゃいけないからね」

そいつは俺がいる孤児院へ行くと事情を話し、そして慌ただしく荷物をまとめだす。

その手際は、子供だった自分から見てもいいものじゃなかった。

で、さんざん散らかして荷物をまとめ、そいつの家に向かう時。

「おっと、大切なコトを言い忘れた。うちに来る前に、一つだけ教えなくちゃいけないことがある」

いいかな、と。

これから何処へ行く？　なんて気軽さで振り向いて、

「——うん。初めに言っておくとね、僕はニートなんだ」

ホントの本気で、仰々しくそいつは言った。

一瞬のことである。

今にして思うと自分も子供だったのだ。

俺はその、冗談とも本気ともとれない言葉を理解できないで、

「——うわ、爺さんすごいな」

目を輝かせて、そんな言葉を返したらしい。

以来、俺はそいつの生徒兼子供になった。

その時のやりとりなんて、実はよく覚えていない。

ただ事あるごとに、親父はその思い出を口にしていた。

照れた素振りで何度も何度も繰り返した。

だから父親——衛宮切嗣^{えみやきりつぐ}という人間にとって、そんなコトが、人生で一番嬉しかった事なのかも知れなかった。

……で。

孤児^{オヤジ}だった子供に、自分はニートなんだ、なんて言葉を投げかけた切嗣も切嗣^{オヤジ}だけだ。

それが羨ましくって目を輝かせた俺も俺だと思う。

そうして俺は親父の養子になって、衛宮の名字を貰った。

衛宮士郎^{えみやしろう}。

そう自分の名前を口にした時、切嗣と同じ名字だという事が、たまらなく誇らしかった。

そして、それから五年の歳月が流れたある日。

俺は夜、親父と縁側に出て月を眺めていた。

冬だというのに気温が低くなく、少し肌寒いだけだった。

親父は月を酒の肴にしていた。俺もすることがないので、月を眺める。

綺麗な月だ。そう思っているときだった。

「子供の頃、僕は有能な教師に憧れていた」

ふいに親父が、少し悲しそうにそんなことを言った。

「なんだよそれ。憧れてたって、諦めたのかよ」

たぶん俺は不機嫌な顔をしていたと思う。

俺は親父が――衛宮切嗣が自分を否定する言葉が嫌いなのだ。それだけ、『衛宮切嗣』という男を好いていた。

二トなのに俺に一生懸命勉強を教える親父に憧れていたし、目標にしていた。

いつか俺も、赤点で困っている子供を救える、『有能な教師』に。

「うん、残念ながらね。ティーチャーを目指せるのは期間限定で、オトナになると、なるのが難しくなるんだ。そんなコト、もっと早くに気が付けば良かった」

月を見ながら言う親父。だけれど、俺は見逃さなかった。親父の顔が辛いのを我慢して、無理矢理笑っているのを。

何かがある、とは思った。けれど、親父が苦笑してまで言いたくないことだ。

俺は納得したフリをして、「そっか。それじゃしょうがないな」と言った。

「そうだね。本当に、しょうがない」

やはり親父は悲痛な顔をした。

――。

「うん。しょうがないから俺が代わりになってやるよ」

俺の憧れの衛宮切嗣（おじい）が諦めた夢だ。

だったら、息子である俺が言うことなんか、決まっているじゃないか。

「爺さんはオトナだから無理だけど、俺なら大丈夫だろ。まかせろって、爺さんの夢は――」

誓いの言葉は続く。俺がこの日を覚えているのは、一概に月が綺麗だったから、というわけではない。

それだけ真剣に、誓いをしたからだ。

俺が言い終えると、親父は柔らかく笑い、

「そうか。ああ――安心した」

親父は最後に、また笑った。

『ただいまー』

「む、この声は……イーリーヤー！」

親父は先ほどのシリ阿斯を一切無視して、玄関へ駆け出した。

『イリヤ！ お帰り！ さぁお風呂に入ろう！ 疲れたろ、僕も今入ろうとしていたんだ！』

『変態！ 助けて、誰かー！』

「……………」

ふと、思うことがある。

どうして俺は、あんなダメなやつに憧れたのになって。

『イーリーヤーー！！』

『きゃああああー！！』

ダメだ……アイツ、早いとこなんとかしないと……。

いちのじょう（前書き）

時間がかかってしまいすみませんでした！

次回はもう少し早くアップできるように努力します！

追記

展開を変えるため、ちょっと編集しました。

申し訳ございません。

いちのじょう

「——時は来た。参加する受験生は七人。彼らマスターは七つのクラスに分かれたサーヴァントを使役し、合格通知をもらうために競い合う。それが——」

その男は、光が注ぐ窓を背にして、言葉を紡ぐ。

そして、いったん区切り、今まで閉じていた目を開く。

「——受験戦争」

決まった、と言わんばかりのその瞳。つりあがった口角。

こんなしたり顔をしたのは、冬木市の新都にある冬木教会——専ら、言峰教会と呼ばれることが多い——にて、神父をしている言峰^{ことみ}綺礼^{ねきれい}だ。

黒衣を身にまとった長身は、一度見たらなかなか忘れない風貌だろう。

「……綺礼」

そんな綺礼を見て、ため息をこぼす者がいた。

彼の父、璃正^{りせい}だ。九十に手が届くような歳でありながら、その風貌は生気に満ち溢れている。

しかし、今の困ったものを見る顔は、歳相応の顔だ。

「はっ……！ 父上……」

璃正は教会の椅子から立ち上がり、祭壇でしたり顔をしていた息子に近寄る。

「綺礼……お前は何をやっているんだ？」

「そ、それは……」

——言えない。誰もいないと思っていたから、ちょっとカッコいい台詞の練習をしていた、なんて、口が裂けても言えない。

綺礼は璃正から目を逸らして呟く。その声は少し震えていた。

綺礼の考えていることがわかったのか、璃正は呆れ顔で再びため息をついた。

「お前に監督役を譲って、もう十年になるな。……受験戦争の監督役に就いて、舞い上がっているのはわかってるつもりだ。……だが、節度をもってくれ」

璃正は語調を強めて、小さい子を叱るように言う。

「わかりました……」

その言葉に、綺礼はばつが悪そうに頭をたらしながら呟く。

綺礼には、璃正に頭が上がらない理由があるのだが……これはま

た、別の機会に。

「……それで、受験生はいま何人揃ったのだ？」
マスター

璃正は会話を切り替えるように、別の話題を振る。

「現在、参加資格を持ち、聖杯大学を視野に入れているのは六人です」

「あと一人か……」

「……ですが、すでに家庭教師同士の小競り合いは起きているようです」

「……では、三日待とう。それで七人目が現れないのなら、どこから調達しよう」

監督役は綺礼だが、最後の決定権は璃正にある。まるで摂関政治のようだ。

「では、そうしましょう……」

「では、ワシはこれで失礼させてもらう」

綺礼は璃正に一礼し、璃正はそれを確認して教会の出口へ向かう。しかし、いったん立ち止まり、綺礼に向き直る。

「ワシが神父でよかったな。でなければお前は今頃――」

「父上、その話はやめましょう、不毛です」

璃正は三度^{みたひ}ため息をもらして、教会を後にした。

そして、残された綺礼は――

「時は来た！」

――決め台詞に磨きをかけていた。

.....

四月は始まりの季節である。冬の寒さから解放された動物たちは、外界へ出て活動を始める。

人にもそれは当てはまり、入園式に入学式、入社式と、何かとスタートする季節だ。

そんな四月の半ば。新しいクラスでの距離のとり方に戸惑いながらも、前の学年で同じだった者と新たな友達探しに奮闘する時期。

衛宮士郎が所属する二年C組は、いま、数学のテストを行っていた。

一年の全科目の総復習を兼ねたこのテストは三日間行われ、数学はその三日目の最終科目だ。

だが、テストと言っても、そんな仰々しいものではない。簡単な、一年次のおさらいだ。

最低でも五十点は取れるようなテスト。

士郎にとってもそれは易しい問題であった。

シャープペンは止まることなく、彼が今まで学習していた成果を記入していく。

（あ、ここ爺さんに習ったところだ！）

勉学の師である衛宮切嗣と勉強していた奇蹟を辿るように、問題は埋められていった。

キンコンカンコン。

「後ろから集めてきてください」

教師の言葉で、小テストが後ろから前へ、ベルトコンベアのように回されていく。

全てのテストが教師の手元に集まったと同時に、教師は教室から

出て行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして今日。先日行ったテストが返却される日だ。

もちろん、士郎には自信しかない。『合格』の二文字以外ありえないのだ。

「おい衛宮、自信はあるのかい？」

「慎二^{しんじ}か。まあ自信はあるかな」

間桐慎二^{まとうしんじ}は、士郎の中学校以来の親友だ。弓道部の副主将を務めており、おまけにルックスがいい。そのため、女子から多大な人気を誇っている。

……髪型がワカメみたいだが。

「まあ、衛宮がどれだけ自信があろうと、僕には勝てないだろうけどね」

「だろうな。中学の時から、慎二に勝ったことなんかなかったし」

「そうさ、衛宮が僕を越すことなんかできないのさ！」

そう言い、高らかに笑いながら慎二は自分の席へ戻っていく。

「……衛宮よ、あれと付き合っていて腹が立たんのか？」

と、古風な話し方で士郎に近づいてきたのは、柳洞一成だ。

生徒会長を務めており、士郎とは一年からの親友。実家は柳洞寺という寺だ。

一成は眼鏡を上げながら、士郎を見据える。

「いや、もう慣れたよ。中学のときはそうでもなかったんだけど」

「傍から見ても殺意が沸くぞ。あれを正面から受けたら、俺は手を出してしまうかもしれん」

そう言いながら、自分の掌を殴る一成。……真剣なのかもしれない。

「そんなことしたら女子が怖いぞ？」

「俺はあまり女子が得意ではないのだ。お前らとつるんでいたほうが楽しな」

「……………」

「嫌われても、お前がいるしな、衛宮」

一成は士郎の肩に手を置き、ジッと目を覗き込みながら言った。

士郎に嫌な汗が垂れた頃に、一成は手を離し薄く笑った。

「……深い意味はないが、聞いてくれ。一成って実はゲ——」

「おっと、先生がくるな、席につかねば」

士郎が言い終わる前に、一成は自分の席に戻っていった。

深く追求するのはよそう。この関係を壊したくないし。

士郎はそう思い、『一成男色家説』をゴミ箱に入れた。

数学はテスト返却だけで終了した。そして、士郎の周りには、慎二と一成が返却された全てのテストを持ってやって来ている。

「衛宮、テストはどうだったんだ？　僕はこんな結果なんだけどね」

そう言っって慎二が机に並べたテストには、『間桐慎二』の横に、赤ペンで『83』『79』『85』など平均点より高い点数が書かれていた。

「慎二点数高いな。まあ、最初から慎二に勝てるだなんて思ってなかったけどな」

「決まっているだろ、衛宮が僕に勝てるわけないじゃないか」

うつすらと笑みを浮かべながら慎二は士郎の顔を見る。

それを見た一成は不機嫌そうな顔で慎二を睨みつける。

「そんな点数で衛宮をいびるでない」

一成の言葉に、今度は慎二が露骨に嫌な顔をした。

「何だよ、そう言うお前は何点だったんだよ」

一成はふつと笑いながら返された回答用紙を慎二の眼前に押し付けた。

一成の点数は、士郎の位置からだと思えづらい。しかし、慎二の驚愕した顔を見れば、慎二よりも点数が高いことはわかった。

「一成、何点だったんだ？」

士郎の問いかけに、一成は回答用紙を見せることで答えた。

「き、九十二点!？」

悔しいのか、慎二は一成の他のテスト結果のも目を通す。だが、慎二の顔は一向に陰しくなる一方だった。

士郎は一成のテストに目を通しながら、感嘆の声を上げていた。

「……スゲーな、一成は。さすが生徒会長ってだけはあるな」

「もつと褒めていいんだぞ、衛宮！」

とても喜んでいる様子の一成。点数が高くて喜んでいるのか、士郎に褒められて喜んでいるのかは不明だ。

「おい、衛宮！ お前の点数はどうなんだよ！？」

天狗になっていたところを、一成に鼻をへし折られてご機嫌斜めの慎二は、怒りの矛先を士郎に向けた。

「俺は二人ほど点が高いわけじゃないから、あまり見せたくないんだけどなあ」

「いいから見せろよ！」

慎二は士郎のテストを強引に引ったくり、机に並べた。

「……………」

「……………」

「お前らの後だから出しづらかったんだよな。今度からは一番に出させてもらっつよ」

「……………」

「……………」

「いやあ、参ったな、自信はあったんだが」

「……………」

「……………」

「ん？ どうしたんだ、二人とも？ 時間が止まったみたいに固まって。何かに啞然としたように口を開けてさ」

「「そりゃこうなるわ！！」」

反りの合わない二人の、意外なシンクロだった。

バンつと机を叩きながら、二人が士郎に吼える。あまりにその音が大きく、クラスメイトの視線を嫌でも買ってしまう。

「？ なんです」

「たわけが！ 何が『なんです』だ！」

「それはこっちの台詞だ！」

そう言っつて、慎二は士郎のテストを一枚掴み、それを士郎に見えるように突き出した。

テストは日本史の回答用紙だ。点数欄には『24』と書かれている。

「この問題！ 『豊臣秀吉が行った検地は何か？』って問題！ 何だよ『大根けんちん』て！ どれしているんな具があつて美味しい汁物料理に大根しか入れないんだよ！ 美味しさも半減だろ！？ しかも、問題文に『検地』って書いてあるんだから、せめて『
○検地』で書けよ！」

「ちなみに『けんちん』ってのは建長寺の修行僧が作っていた『建長汁』がなまって『けんちん汁』になったとウィキ。ディアに書いてあったぞ」

「お前曲がりなりにも寺の息子なんだからそれくらい普通の知識で身につけておけよ！ 情報源がウィキとかやめろよ！」

「そうなのか、一成は物知りだな」

「料理好きなお前と会話を広げるために調べておいたんだ」

「そうか、じゃあ一成、こんなの知ってるか——」

「なんと、そうだったのか！」

「……二人で話しているところ悪いが、脱線しすぎだからな、この会話！ 衛宮の『大根けんちん』からここまで広がるとは思わなかったよ！」

肩で息をしている慎二。そんな慎二と交代するように、今度は一成が士郎のテストを持って士郎に近づいてきた。

「これを見るんだ衛宮」

次は三十一点の国語のテストのようだ。……というか、距離が近い。吐息がかかるくらいの距離は、さすがにキツイ。

士郎は一成に気づかれないように少し後ろにずれた。

「衛宮、この問題だ」

一成が指差している問題は、漢字の読み、書きの問題だった。

問題は、『初春のはつねの今日の玉ばはき』という万葉集に載っている一句の、『初春』の部分に下線が引いてあり、この漢字の読みを書け、という問題だ。

「答えは『はつはる』なのだが、どうして衛宮は『ういはる』なんだ？」

「いや、友達に勧められてさ、『超電磁砲^{レールガン}』ってアニメ。俺は好きだよ、初春^{ういはる}」

「まったく、アニメのキャラクターを好きになるとはな……。まあ、そんなお前もいいと思うぞ」

一成は士郎の肩に手を置き、二、三度うんうんと頷く。

「……………」

……脳内のゴミ箱に捨てた仮説を、もう一度取り出す必要があるかもしれない。

その後も、慎二と一成の士郎のテストに対する突っ込みが止むことはなかった。

特に数学。他の科目が二十五から四十の間を彷徨^{さまよ}っていたのに、数学はなんと四十三点だったのだ。

それは、士郎が切嗣から一番熱を込めて教えられた教科だった。

「爺さんの教えられた通りやったのにな……」

その言葉に、二人は呆れ顔でため息をつく。

「他のよりはマシだが、教えられた結果がこれか。まったく、衛宮。お前の父親は何を考えているんだ？ 僕には皆目検討がつかない」

「……驚くべきことだが、答えが当たっている問題が多いのは確かだ。しかし……」

なあ？ と、慎二と一成は顔を見合わせる。

「……どうして足し算と引き算しか使わないんだ？」

そう——士郎は数学のテストの計算式を、全て足し算と引き算で解いていたのだ。

二次方程式や二次関数をどのように駆使して足し算引き算で計算しているのかは知らないが、しかし、正解している問題が多い。

途中式を確かめれば早いのだが、いかんせん足し算と引き算だけの計算式は、非効率のため数字が大量に出ている。そのため、いろいろな計算が入り組んでおり、どこがどの式と繋がりをもっているのか判断できない。

「いや、爺さんがさ、俺が小学校のとき宿題教えて、って言った
らさ——」

士郎派あの日のを二人に語る。

『爺さん、数学教えてくれよ』

『ん？ どれだい』

『ここなんだけど……』

『……なんだい、これは』

『え、先生が親と一緒に協力して中学生が解く問題をしようって
宿題なんだけど』

『……一次関数か』

『スゲー難しいけど、爺さん、頑張ろうぜ』

『……いいかい士郎。社会にでて使うのは加減乗除と割合、面積
と、小学校で習う範囲くらいなんだ。こんな問題、できなくても何
の恥でもない』

『そ、そうなの？ でも、宿題だし頑張ろうよ』

『だから必要ないと——』

『俺には必要だって！ やってこないと怒られるんだよ』

『だから——』

『爺さん頑張ろって！』

『……ええい！ こんなもの……こうだ——！』

だだだだだッ！

『ああ！ 俺の宿題が爺さんのワルサーWA2000（エアガン
を切嗣好みにカスタマイズされたモノ。弾の速度は圧縮空気式に勝
る）で蜂の巣に——！』

『士郎、僕が君に教えるのは、社会に出るのに必要なことだけな
んだ。だから、僕は君に小学校の数学について徹底的に教える。――
特に足し算引き算を』

『え！？ そんなの俺知ってるよ！』

『人には得手不得手というものがあるんだ。士郎、君に数学は無
理なんだよ』

『ええ！？ まだ入学してないのに！？』

『特に、士郎が極めるのに見込みがあるのは、足し算と引き算な
んだよ。それ以外はあまり期待ができない』

『でも、周りについていけなくなるじゃんか』

『安心しな。僕を誰だと思っているんだい？ ……足し算と引き算の本当の力を、みんなに見せ付けてやるんだ』

『……うん。わかった！』

「——こうして、俺は足し算と引き算で数学に対応できるだけの力を身につけたんだ！」

ちなみに、翌日学校で先生にはこっぴどく叱られたのは言わずもがなである。

三者面談にまで発達したが、切嗣が場をかき回してくれたおかげで、士郎は帰宅許可がおりた。

……切嗣と先生の二者面談が始まってしまったが。

「お前の父親がアホなだけじゃないか！！」

「よく穂群^{ほぐむ}原学園に入学できたな、衛宮よ」

慎二は怒鳴りながら、一成は関心しながら、士郎に対して感嘆の言葉を述べた。

ふと、士郎は視線を感じ、窓辺に目を向けた。すると、さっと視線を前に戻した少女を見つけた。

（あいつは……）

「衛宮よ、お前はいま女子のほうを見ていたな？」

「え？ まあ」

「かあつツ！！」

一成はそう言って、空手チョップを士郎の脳天にお見舞いした。

「おまつ！ 一成！ 黒帯所持者が素人相手にこんなことしていいのかよっ！？」

「次の授業が始まる。間桐、行くぞ」

一成はそう言って、慎二と共に席へ戻っていった。

.....

次の休み時間。

士郎は、今まさにどこかへ行こうとしている少女に話しかけた。

「とおさか
遠坂」

「.....」

しかし、聞こえなかったのか、少女はそのまま進んでいった。

「遠坂！」

艶のある黒髪の左右を適度に結び、他を全て垂らした髪型——通称ツーサイドアップと言う——をした少女の肩を叩いて、士郎は今度こそ少女を呼び止めるのに成功した。

「……。何かしら、衛宮くん？」

一瞬、めんどくさそうな顔をしたが、士郎が瞬きをした隙に、少女の顔は満面の笑みに変わっていた。

遠坂 凛^{りん}。

容姿端麗、文武両道、才色兼備と、いろいろとハイスペックな少女だ。

先ほど、士郎のことを見ていた少女でもある。

「さっき俺らのこと見てたろ？ うるさかったか？」

「いいえ、別に迷惑、というわけではなかったの。ただ、楽しそうだな、って」

名前のように凛とした感じはなく、むしろその逆で、穏やかで暖かな話し方だ。

常に笑みを浮かべているその顔には、どきりとしてしまう。士郎も思春期の少年なのだ。この笑顔に心動かされない者は、一成くら

いのものだろう。

ちなみに、一成と凜は仲が悪い。

犬猿の仲とはまさにこのことと言ってもいい。

一成に凜の恨みや鬱憤を語らしたら、全てを語り終えるか本人が駆けつけるまで止まらないほどだ。

閑話休題。

「遠坂はどこへ行こうとしてたんだ？」

「言わなければならないかしら？　あまり言いたくないのだけれど」

凜が怪訝そうな顔をしたため、土郎は罰の悪い顔をし、謝る。

「なんか悪いことしたな、ごめん」

「別にいいわよ。衛宮さんと話す機会なんて、滅多にないしね」

一成と一緒にいるから、話しかけづらいのは確かだ。土郎からは話しかけようとすれば、一成がそれを妨げるし、逆もまた然りだ。

だから、一成が生徒会のようで行き、凜が誰とも話していないときでないと、会話はできない。

今回の会話は奇跡と言っても過言ではない。

「そりゃよかった。俺も遠坂と話せてよかったよ」

「ふふ、ありがと。……そうそう、美綴みつづりさんがたまには顔出してほしいそうよ？」

凜のいう美綴とは、士郎が前に属していた弓道部の主将を勤める美綴綾子あやこのことだ。

「……その内な、って伝えてもらえるか？」

「わかったわ。……それじゃあ、私はこの辺で失礼するわね」

「おう。引き止めて悪かったな」

「いいのよ、別に。さっきも言ったでしょ。私は衛宮くんと話せたからいいって」

そう言っつて、凜は数歩進む。そして、くるりと回転して、士郎の瞳を捕らえた。

「また教室でね、衛宮くん」

最後に笑って、凜はその場を後にした。

「……わかった」

士郎は凜が階段から降りていくまで、その背中を見つめていた。

「……………」

正直に言えば、見蕩れていた。

「……こんなところ、一成が見てたらうるさそうだな」

もともと言う気はないが、一成にだけはこのことは黙っておこう
と思った。

いちのじょう（後書き）

…… 士郎の間違いは、過去に私が実際にした間違いです。

今思い出しても恥ずかしいものばかりです。

この物語では（当たり前ですが）、原作とは違う点が多々あります。

そのいい例に、凜と同じクラスである点、切嗣や璃正など、第四次で活躍した人物が生きてたりしています。

少しでもおもしろくするためにそうさせていただきました。

そう言うのに抵抗がある方などは、不快かもしれませんが、これで通させていただきますので、ご了承ください。

いちのちゅう（前書き）

遅くなつてすみません！！

プライベートが忙しくなりまして……主に、将来のことです。

そんなわけで、遅筆な私ではありますが、それにますます拍車がかつてしまいそうです。

楽しみになされている方。

『速さが足りない』と思いながら、私に殺気を送っておいてください。

それと。

本文から、いつきに内容が変わります。

いちのちゅう

学生にとっての共通の楽しみと言ったら、やはり昼休みだろう。

登校してからの約四時間、面倒くさいことこの上ない授業と言う名の拷問を耐え抜き、やっと開放される至福の時間。

登校途中で買ってきたパンやおにぎりを食べたり、母親が作った愛情たっぷりの弁当を食べたり、金も母からの愛もなく何も食べない者など、さまざまな者がいる中で、士郎はそのどれにも属していなかった。

家庭科は、士郎の数少ない得意科目の一つだ。切嗣が何もできないので、気がつけば家事全般が水準以上になっていた。

普段は自分で弁当を作って持ってくる派であったが、いかんせん、今日は寝坊して作るのを忘れてしまった。

ので。

「いやあ、桜、助かるよ」

「いえ……先輩が喜んでいるのなら、作ってきたかがあります」

士郎は間桐桜に弁当を作ってきてもらった。誰かに作ってもらった、という点では他のそれと同じだ。

だが、他の弁当とは格が違う。別に士郎は母親の手作り弁当をバ

力にしているわけではない。

ただ、母親が作った弁当と可愛い後輩が作った弁当、どちらが嬉しいと問われれば、誰もが後者を選ぶだろう。

「桜、本当に料理がうまくなったなあ。前は俺のほつがうまかったのに」

「いえ、私は日本食だけです。他はまだです」

「日本食が俺よりうまいのは否定しないんだな……」

ふふふ、とおしとやかに笑う桜は、もう女性のそれだった。

間桐桜は苗字からわかるように、慎二の妹だ。藤色の長い髪をストレートにしている。

おっとりしていて物静かなその物腰は、本当に士郎より年下なのかとつたがいたくなるほどだ。

……ついでに、俗っぽい話になるが、桜は年下なのにも関わらず、？すんげえ？ものを有している。士郎のクラス的女子でも、太刀打ちできる者は数少ないだろう。あくまで推測だが。

「にしても、本当にすごいな、弁当……」

「少し頑張りすぎたかもしれませんね」

「少し頑張っただけで重箱使っただけの量になるか普通!？」

きょんとしている桜。

……そう、士郎の眼前にあるものは重箱である。

三段重ねの重箱が、桜が士郎のために用意した弁当であつた。

でーんと、士郎の机に鎮座した重箱。

蓋を開けると、まず真っ先に飛び込んできたのは、真っ赤な伊勢海老。しかもでかい。

その伊勢海老を囲うようにして出し巻き玉子、紅白かまぼこ、昆布巻き、伊達巻、レンコンに黒豆――

「ってこれ、おせち料理じゃなか!」

「そうなんです。私、頑張っちゃいました」

すごい笑顔でそんなことを言われたら、あまり強く突っ込めない。

「……おせちは正月に食べる料理だろ?」

「先輩の日々が、いつも正月みたいならいいなって」

「その気落ちは嬉しいけど、だからって形から入るのはどうなんだ!？」

「……迷惑、でしたか?」

「……………」

士郎は反射的に桜から目を離す。

（上目使いは卑怯じゃないか……！）

ただでさえ、異性として意識してしまっているのだ。あまり惑わせないでほしい、と言うのが素直な気持ちだ。

士郎は一つ咳払いをしてから、桜に向き直る。

「迷惑じゃないよ、ありがとう」

すると、桜の顔がぱっと明るくなり、「次の段も見てください」と急かす。

「あ、ああ。わかった」

開けるのに若干恐怖感を覚えながら、士郎は一段目を持ち上げた。

（……次は、ちょっと油ものとかがありますように！）

そして、士郎は次の段を確認。

唐揚げ、サイコロステーキ、フライドポテト、コロッケ、アジフライ、トンカツ、エビフライ――

「今度は重すぎるだろ！」

「先輩、揚げ物とかお肉もほしいかな、と思ひまして」

「どれだけ極端なんだよ！」

「おかげで油が私に反旗を翻して襲ってきましたよ」

「無理はするなよ！」

いろんな意味で一生懸命な子だな、と思いながら、土郎は桜に突っ込みをいれる。

「ささ、先輩。最後もこのままの勢いで開けちゃってください」

若干——というかなんかなり——不安だ。このままの流れで、普通の料理とかありえない。

少しはまともなモノが来ますようにと願ひながら、土郎は最後の段を見た。

まず目の前に飛び込んできたのは刻み海苔。ついで錦糸玉子。土郎が箸で掬って見ると、イクラ、筍、たけのこ、レンコン、人参、かんぴょう干瓢——

「ちらし寿司は雛祭りだろうが！ どうして一月と三月がこの重箱内でコラボしてんだよ！！」

「和食には自信があるので、一番頑張りましたっ」

「答えになってないからな！？ つーかこの流れなら、最後は日の丸弁当で『ここまで手を凝らせよ！』って俺が突っ込むとこじゃ

ないのか!？」

「先輩に日の丸弁当だなんて質素なもの作りませんよ」

桜はおかしそうに笑う。落ちを期待してた士郎は肩透かしをくらった気分だ。……まあ、桜にお笑いの鉄板を期待した士郎が悪いのかもしれないが。

「先輩、どうぞ食べてください。時間はたつぷりあるとは言えませんが」

桜は自ら持参したらしい水筒を、士郎の前に差し出された紙コップにお茶を入れる。

(桜からの厚意を無駄にしちゃいけないしな……)

もしも食べ切れなかったら、一成とかクラスの奴にあげればいいか、と考える。

そもそも、食材を無駄にしたくない士郎は、なるべく自分で完食しようとしていた。

誰かにあげるのは最終手段だ。

士郎は生唾を飲み込んで、箸を構え――

「ちょおおっと待ったああッ!！」

今まさに士郎が食べようとしたとき、誰かの声が遮った。

声の出所は、士郎と桜の後ろにいる慎二からだった。

「どうしたんだ、慎二？」

士郎が不思議そうに聞くと、慎二はこめかみに青筋を浮かべん勢いで吼える。

「『どうしたんだ？』、じゃないだろが！ 見ろよ、これを！」

そう言つて慎二が指差したのは一般的なタツパーウェア——俗に言うタツパ——だった。

「それがどうしたんだ？」

「中身を見てみる！」

そう言つて慎二はタツパーウェアの蓋を取り、士郎に中身を見せる。

中にはぎつしりと隙間なく押し込まれた白米。その一面の白の中心に置かれた赤い梅干。

みことな日の丸弁当だった。

「それがどうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもないだろう！ 僕も桜から作ってもらつたのに、なんだこの差は！！ どうしてこんな格差社会が生まれて

いるんだよ!？」

慎二は士郎に話していたが、最後は桜の方に向き、桜に質問を投げかけた。

そして桜は士郎と話していたときの笑みで、慎二を見る。

……いや、笑顔は笑顔なのだが、何かが違う。何だか、威圧感があると言つか。

「兄さん、お弁当を作ってもらって、初めに言う言葉はそれなんですか？」

「……っ！　そ、それは……ぼ、僕はそんなこと頼んだ覚えはないぞっ」

「へえ……そうですか。では、これからは作りませ——」

「で、でもたまには作ってもいいぞ！」

「いえいえ、兄さんのために食材を使うのなら、先輩に使ってあげたいですしね」

にこにこにこにこ。

浮かべているのは満面の笑みなのに、士郎が今の桜から感じるものは恐怖でしかなかった。

「あら、先輩。箸が止まっていますよ？　口に合いませんでしたか？」

「そ、そんなことないさ！」

食べる速度を通常の二倍にしてみせる。

口の中に入れるだけ入れて、口に何が入っているのか自分でも把握できないくらい入れて、お茶などを駆使しながら飲み込み、ニツと笑ってみせる。

「先輩、体が小刻みに震えてますが、どうかしたんですか？」

「……え？ 不自然に震えているが、こ、これは決して……うつぶ。む、無理をしているわけじゃないぞ？ ちょ、ちょっと寒いだけだ！」

「春なのですか？ 私はあたたかいと思うんですが……」

「俺は寒がりなんだよ！」

「……そう、ですか。ならいいんです。食べれなくなったらどうしようかと思ひまして」

そう言つて、桜は慎二に向き直る。

その瞬間、士郎はこの世の終わりの様な顔をしたままぐったりとしていた。

「それで兄さん、まだ文句でも？」

「あるさ！　どうしておかずにないんだ！」

「梅干はおかずですよ、兄さん。そんなこともわからなくなってしまうたんですか？」

「いや、それはそうだけど……でも、せめてご飯に塩をまぶしてくれてもよかつたんじゃないか！？」

「いちおうかけましたよ……五粒ほど」

「塩五粒でこの量のご飯に味が行き渡るわけないだろうが！　つか五粒だけ正確にかけれるとかすごいな！」

「突っ込みが長い……聞くのが面倒です……」

耳を手で塞いで、少し嫌そうな顔をする桜。

慎二はそれを見て、悲しそうな顔をして黙ってしまった。

「……なあ、桜、さすがに言い過ぎなんじゃないか？」

見かねた土郎は、慎二の味方になり、桜に苦言を呈する。

「先輩……」

「慎二だって、こんなに悲しんで——」

そう言って、土郎が落ち込んでいる慎二に向き直る。

そこには——

「うるさいぞ、衛宮。これは間桐家の問題だ。部外者は関わるな」

——そこには、いつものウザイ……もとい、これまで通りの慎二の姿があった。

もう慎二に助け舟を与えないと心に誓い、士郎は正月とひな祭りの合わさった重箱に挑むのであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

五時間目は体育だった。昼食をとったあとと体育をさせるのはどうかと思うが、決まっていることなので仕方がない。

みんなが愚痴を零しながらも更衣室へ移動し、着替えをする。

「……衛宮、お前はこれを使い」

そう言っで一成が士郎に渡したのは、よく水着に着替えるときに腰に巻きつける、上のほうにゴムがついているタオル——正式名称はラップタオルという——だった。

「え？　　いらないけど。見られてもあんま気にしないし」

そんな土郎の言い草に、一成は顔を真っ赤にした。

「お、お前と言う奴は……！ もっと自分を大切にしろ！」

「そうになると、衛宮はお前との縁を切らなきゃならなくなりそうなのだが！？」

土郎と一成の会話を聞いていた慎二が、堪らず声を荒げた。

「衛宮、そいつから離れろ！ 掘られるぞ！！」

「はぁ？ 掘る？ 穴をか？」

「そうだ！ 半径五メートル以内に入るな！」

「別に穴くらい掘らせてやれよ。それで一成の気が晴れるならいいことじゃないか」

「無自覚って恐ろしいな！」

何言っているんだこいつ、と言った感じの土郎に、慎二は一生懸命に事の重大さを伝えようとしていた。

案外、慎二は友達思いでいい奴なのかもしれない。

「ま、間桐……貴様……！」

そんな慎二に憤りを感じていたのは一成だ。

肩を震わせながら、慎二のことを睨みつけていた。

「な、なんだよ?」

ただ事ではなさそうな雰囲気、慎二はうつろたえてみせた。

「貴様……女子じゃあきたらず、衛宮に目をつけたのか……?」

「そんなわけねえだろうがッ!!」

「……何のことで盛り上がっているか知らないけどさ。もう時間だから行こうぜ?」

「「お前のことだ!!」」

士郎が仲裁は、逆に火にガソリンをそそいだような結果になってしまった。

体育館の中には、すでにバレーボールのネットが設置されていた。

そんな中、体育館の中央。一際目を惹く者が仁王立ちしていた。

「遅かったな、雑種共」

「ギルガメッシュ、いたのかよ」

「黙れ雑種。お前はしゃべるな」

士郎の目の前にいる人物はギルガメッシュ。……苗字は知らない。

燦然に煌く金髪に、真紅の血を思わせる赤い瞳が特徴。

——だが、一番の特徴と言えばやはり。

「普通、体育着に金箔貼るか？」

「黙れと言うのが伝わらんのか。王である我が^{オレ}言っているのだ、一回で聞け。これは我のマイカラーだ」

「いやでもさ、お前制服にも金箔貼って——」

「黙れと言っているだろうがア！」

激情し、殺意をむき出しにするギルガメッシュに対峙し、士郎も臨戦態勢をとる。

そんな中。

「短気すぎだろ！」

耐えられなかった慎二が突っ込みを入れる。

「何か言ったか、海藻風情が！」

しかし、ギルガメッシュに怒りの矛先を向けられてしまったため、慎二は渋々押し黙る。

「ふん、興が削がれた。命拾いをしたな、雑種」

ギルガメッシュはそう言つと、これまた金ピカの上履きを鳴らし

ながら歩いていった。

「アイツ、恐ろしいよな」

ギルガメツシュが遠ざかった頃、慎二が士郎に恐る恐る言った。

「そうか？ ……まあ、普通ではないと思うけど」

「！ ま、まあ、僕も恐れたが、怯えはしなかったがな！」

「あれ？ 足を生まれたての鹿みたいにしてただろ？」

「あれは昨日スクワットしすぎて筋肉痛になってたんだよ、勘違いするな」

「背中びつしよりなのにな？」

「うるさいな！ 衛宮に分際で！」

慎二は一方的に話を切り上げると、そのまま士郎の元を去った。

「……何なんだ、アイツ」

士郎がそんな疑問を抱いていた時。

「A A A L a L a L a L a i e ! ! !」
アアアララライ

突如、体育館を震わすような雄たけびが体育館の入り口で聞こえた。

その声に、士郎は耳を塞ぎながら振り向く。

そこにいたのは、巨大な馬にまたがった、大男であった。

しかも、ただでかいわけではない。筋肉隆々という言葉を体現したような巨躯だ。

鋭く炯々（けいけい）とした双眸は、見るものを射抜いているようだ。

そんな肉塊を乗せている馬も凄い。馬も、主人に負けず劣らずな体躯をしている。

体育館の最奥まで行くと、馬に跨る大男が馬に何らかの指示をしたのか、馬は嘶いななきながら止まった。

「全員、集ごおう！！」

腹のそこから出した彼の怒号にも似た声は、体育館全体を再び震わした。

呆けていた生徒たちも、その声で覚醒し、そろそろと大男の元へ向かう。

「貴様ら！ 授業を始めるぞ！ 欠席している者はおるか！？」

大男——いや、体育教師、イスカンドルは笑顔を崩さないまま、近くにいた士郎に問う。

「確かいません……いないよな？」

隣にいた一成は「ああ」と答えたので、改めて「いません」と伝えた。

「まことか！ よおうし、では早速だが、授業を始めるぞ！」

そう言つて、準備体操を始めた。

（破格だけれど、いい人だよな、うん）

そんな評価を、イスカンドルに下す。……おかしな点はあるけれど。

そんなこんなで、準備体操も終わり、再びイスカンドルの周りに士郎たち2・Cの面々が集う。

「さて……今日の授業だが」

イスカンドルは一度咳払いをしてから、バレーボールのネットに目をやる。

「バレーボールだったか？」

「そう先生は言っていました」

慎二が何気なく答える。

「そうか……」

イスカンドルはそう言ったあと、その岩みtainな手でガシガシ後頭部を搔く。

そして、眉根を顰めて、何かを考えているように頭を傾げていた。

「どうしたんだ？」

「何だか、バカが頑張っているいい案だそうとしているようにしか見えんのだが……」

「しかもその案は、支離滅裂なものなんだろう？」

士郎、慎二、一成はひそひそと話し出す。そんな時、イスカンドルは何か思いついたのか、大きな指で爆竹みたいな音の指パッチンをした。

「貴様ら！」

その顔は——怖いぐらいの満面の笑みであった。

「今日はバレーボールはせんぞ！」

は？

2-Cの見事なシンク口率の高さに、士郎は軽く驚愕した。

[illegible]

「今日は野球をするぞ！ 余の盟友ども、征服へ必要なのは、ま
ずは体力だ！ あんな閉鎖空間で球遊びなんぞしている暇があるの
なら、外に出て世界の広さを踏みしめたほうが有意義だと思わんか
！？」

「野球は球遊びではないのですか？」

「バカか、ワカメ頭。いいか、外で球を追いかける！　これは征服に通ずるものがあるう？　一つの球を取り合う……他人のものを奪う……これに何の違いがあると言うのだ！？」

慎二は納得できないまま、渋々引き下がる。この自称『征服王』を言い負かすのは、無理ではないだろうか。

「それでは、チームに分かれる！ 最低でも、七人であること！
ちなみに、一人でも いいから異性を入れるように」

イスカンダルの掛け声と共に、2・Cの男女が話し合いを始めた。

友達同士のチームができていく中、士郎はと言えば。

「慎二、お前組んでるか？」

「今のところはまだ」

「俺らと組まないか？」

士郎はすでに一成と組んでいた。イスカンドルの発言と共に、一成は士郎に「チームになってくれ！」と真剣に言われた。

(……告白みたいだったな)

男同士だし、そんなわけないか、と樂觀視する。……そんなわけないよな？

「間桐……貴様、女子から人気があるはずなのに、声がかかってないようだが？」

一成の皮肉っぽいその言葉に、慎二は肩を竦めながら、

「僕に話しかける勇氣がある女子がいないだけさ。……あれを試みる」

慎二が指差す先には、女子のチームがあり、そこで女子たちが「アンタが行きなさいよ」「無理無理！ かつこよくて近寄れない！」と、黄色い声を出しながらはしゃいでいた。

「すまないね。美貌とは罪だ」

ワカメヘアをふあさあと手でなびかせながら、士郎たちを見る。

「じゃあ、女子と組むのか」

「いや、今回は君たちと組むことにする。男子といたほうが、勝算は上がるし」

「強いものの味方とか……ぶりぶ。ざえもんかよ」

士郎の言葉は、どうやら聞こえていないみたいだ。

「じゃあ、他はどうする？ あと六人。その内、女子も入れるとなると……」

「女子と言うのが、難題だろうな」

主にコイツがいるから、と士郎と慎二は一成を見る。

慎二がいくら女子を引き寄せようと、一成がそれを妨げる。

お互いのスキルで互いを相克して相殺してしまっている。

「女子がなあ……」

二人がため息をついたとき。

「私たちが組んであげましょうか？」

と、物腰柔らかそうな声が、耳をくすぐる。

士郎が振り向いてみると、そこには体育着を着たツーサイドアッ

プの遠坂凜とショートヘアの美綴綾子の姿があった。

「き、貴様ら！」

狼狽したのは一成のみだ。一成いわく、彼女たちと慎二を含めたこの三人は『穂群原三大仏敵』と評価しているらしい。

「あら、柳洞くんは私がいやなのかしら？」

「黙れ猫！」

「あらら、嫌われてんだね、私たち」

綾子は苦笑しながら凜の肩を叩いた。

「俺はいいと思うけど」

士郎は凜と綾子を見ながら言う。

「ありがとうね、衛宮くん」

「ありがとな、あと弓道部に戻らないか？」

綾子の後者の言葉を右から左に聞き流し、士郎は「慎二は？」と聞く。

「遠坂は断る余地はないね。美綴は……同じ部員だから、まあいいだろう」

かっこうつけながら、そんなことを言う。もちろん女子二人は「

何言ってんだコイツ」みたいな目で見ている。

当の本人は気づいてないが。

「一成もいいだろ？」

一成は少し渋った後、「……衛宮が言うなら」と折れた。

「よしこれで五人。スゲートントン拍子で集まるな」

「女子とも組めたし、これであとは誰集めてもいいことになった」

「ちよつといいかしら」

そんなとき、凜が士郎と慎二の会話に割って入ってきた。

「なんだい？」

慎二はスマイルを浮かべながら凜に対応するが、その笑顔をスル
ーして士郎を見る。

「ここは勝ちを狙いにいきましょう？」

「別にいいけど……何だ遠坂、お前負けず嫌いなのか？」

「そ、そんなわけないでしょ！」

凜は少し紅潮しながら士郎の言葉に反抗する。士郎は「そ、そう
か」とうろたえる。

「で、勝ちを狙ったためのメンツ知っているのか？」

「ええ……あそこに」

そう言っ て凜が指差す先にいる人物。

「……マジか？」

「ええ、マジよ」

「遠坂、他を当たろう！」

慎二の焦った声に、凜は意地悪な顔で、

「あら、間桐くんはチキンなのかしら？」

「……っ！ そ、そんなわけないだろ！？」

「いいのよ、別に。誰だって怖いものは怖いもの。衛宮くんにた
の——」

「僕が行ってこよう！」

そう言っ て、慎二は胸を張りながら大手を振って歩いて行っ た。
——いや逝っ た。

仁王立ちをしたギルガメッシュの元へと。

「お前って鬼畜だな」

「あら、何か言ったかしら？」

「……いいえ」

士郎は凜の笑顔に負けた。……可愛いとかの前に怖かったから。

「それはそうと、衛宮くん……さっきから疑問に思っていたんだけれど、いいかしら？」

「ん、なんだ？」

「……どうしておぶっているの？ 彼女を」

「え？」

凜の言っている意味がわからず、士郎は首だけ動かして背中を確認する。

まず目に飛び込んできたのは、真っ赤な瞳。しかし、ギルガメッシュのそれよりは、優しいイメージを受ける。

次はその白さ。透き通るようなその白さは、雪のようだ。

そして最後に銀髪。長いそれはシルクのような高級感を漂わせる。

「い、イリヤ！ いつから背中にいたんだ！？」

「いつからって、ずっとだよ！」

そう言う口リ声を発する彼女は、イリヤ——本名、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

士郎との関係は一言では表せず、言うならば姉であり妹であり同級生である、何とも複雑な位置にいる。

「とりあえず降りろよ!」

「はあい、お兄ちゃん」

そう言つて、猫のように軽やかに着地してみせる。

百四十センチにもみたない身長なので、必然的に士郎は見下ろす。

「どうした、イリヤ」

「お兄ちゃん、チームできた?」

「いや、実はまだ。イリヤは?」

「まだなの。だから今回は特別にお姉さんがチームに入つてあげましょう!」

「マジか?」

士郎としては別に構わないのだが、チームメイトがなんと言つか……。

とりあえず、近場の凜を見る。彼女は「別にいいんじゃない?」

と了承してくれた。

一成は依然として女子は無理を貫いている。まあ、一成の意見は
この際受け付けない。
そして残るは、

「美綴、いいか？」

「別にいいけど……リトバスで言うクドみたいな感じだけど、
そこら辺はどうなの？」

「リトバスのクドがわからないからなんとも言えないが……イリ
ヤはたぶん、凄いかと」

「ならいいんじゃない？」

「だってさ」

士郎はイリヤに目をやる。するとイリヤは「やったー!!」と言
いながら飛び跳ねる。

そして、そのまま士郎に飛びつく。士郎はそれをあやすように撫
でる。

「……許さんぞ」

「どうしてアンタが憤るのさ」

一成の呟きに反応した綾子は冷静に突っ込みを入れた。

……落ち着いたこの二人は、案外お似合いなのかもしれないと思った士郎であつた。

「ていうか、慎二遅くないか？」

イリヤ加盟の後、士郎はチームメイトを見る。

「確かに、まあ別にいいけれど」

「そういえばそうね、別にいいけれど」

「何してるんだろうねー、別にいいけれど」

「遅いな、別にいいけれど」

「お前ら冷たすぎじゃないか！？ とりあえず、見に行こうぜ」

みんな乗り気ではないようすであつたが、士郎がそういうのなら、といったようすで士郎についていった。

「確かこつちに行つたよな」

士郎たちが辺りを見渡すが、士郎の目にはあの特徴的な海草は写つてこない。

「あれじゃない……？」

そう言ったのは綾子で、その指をさす先には確かに慎二がいた。

……ギルガメッシュ跪いた状態の。

金のしゃちほこに屈するワカメの図は、何ともシュールなものであった。

士郎たちのみならず、2・C組のメンツが全員この二人を奇異な目で見ていた。

学園で人気のあるイケメンが、学園の変わり者に跪いているのだ、それもそうだろう。

他の面々が動かない中、士郎は一人慎二の元へ向かった。

「どうした、慎二……？」

「雑種か。頭が高いぞ？」

士郎はギルガメッシュをシカトし、屈んで士郎と視線を合わせる。

「どうしたんだよ」

「お前らが誘えって言うから、僕は誘ったんだよ。そしたら『臣下の礼を取れ』とか言い出してさ。そして今にいたる」

プライドの高い慎二にしてみれば、これは耐え難い屈辱であったろう。

慎二の胸中を思うと、士郎はいてもたってもいらなくなる。

「慎二、起き上がれ」

「で、でも！」

「いいから」

そう言つて、士郎は無理矢理慎二を起き上がらせる。

「ギルガメツシュ、俺らのチームに入らないか？」

「我が貴様^{オレ}に下れと？　あまり舐めるんじゃないぞ？」

血の色をした目を細める。その日本刀のような研ぎ澄まされた鋭い瞳が士郎を射抜く。

そんな視線を受けながらも、士郎は屈せずに見返す。

「違う、俺らはお前に『入ってもらう』んだ」

「なに？」

ギルガメツシュは怪訝な顔をし、士郎を睨みつける。

だが士郎は臆することなく言葉を続けた。

「お前は『嫌で嫌で』『めんどろ』かもしれないが、俺らは『どうしても』お前に『入って』もらいたいんだよ」

わざと強調したように士郎は言う。

すると、その言葉を聞いたギルガメツシュはにやりと笑うと、

「雑種がそこまで頼んで断る我^{オレ}ではない。民の頼みを聞き入るのも王の務め……しかたない、我^{オレ}がしかたなく貴様らのトップに立つてやろう」

そう言つて、ギルガメツシュは不適に笑いながらどこかへ歩いて行つた。

「衛宮……」

「慎二、アイツはお前以上に、異常にプライドが高いんだ。だから、自分を下に下に落として、アイツを立てるように交渉するんだ。そうすると、アイツは承諾してくれるのさ」

（これは、慎二と五年間付き合ってきた俺だけが使える高等テクニクです。他の人はギルガメツシュにお願いするのはやめましよう。殺されちゃうゾ）

士郎は誰に忠告するわけでもないが、そう心の中で誰かに伝えた。

そんなこんなで。

士郎たちのチームには慎二、一成、凜、綾子、イリヤ、ギルガメツシュと七人のチームになった。

クラスの人数が四十人に満たない三十五名のため、全チーム人数が九人にならないのは必然であった。

「よし、これでいいか」

そう思い、士郎たちはイスカンドルの元へ向かった。

そこにはすでに出来上がった三チームの姿があった。

「お前たちは八人か？」

「？ いいえ、七人ですが」

士郎がそう答えると、他の三チームが「え？」と驚いた表情をした。

「え、どうしてですか？」

「いや、ここには九人のチームが二つに八人のチームが一つおるんだが……」

——一人足らんのだ。

欠席者がいるわけでもないのに。

背筋が凍える。まだ夏ではないのに、怪談のような状況に陥ってしまっている。

『『『………』』』

沈黙が支配する。

そんな中。

「す、すまない」

幽かに、いや確かに聞こえた。全員が聞こえていたらしく、いつせいに声のした方を向く。

そこには——紺色の陣羽織を着、腰に長刀をさした耽美な青年がいた。

「まだ、仲間がいない……」

それは、2・Cの生徒である佐々木小次郎さなきじろうであった。

そんな台詞を彼が言った。その時、2・Cのメンツは同じことを思っていた。

（コイツ、影薄すぎだろ!!）

と。

.....

人数的に小次郎は士郎たちのチームに入った。

陣羽織で帯刀、普通にカッコいい外見なのにも関わらず、ここま
で気配を消せるとは……。

目立ってもいいはずなのに、と思わなくもないが、他に濃い奴が
いるからしかたがないのか、と思ってしまうところもある。

「全力を尽くさせていただく」

クールに言い放ち、そんきょ蹲踞する。

「よろしく。……それじゃあ、早速なんだけれどポジション決め
を……」

「我はピッチャーオレをやるのは決定している。あとは適当に決めて
おけ」

ふらりとやって来たギルガメッシュはそれだけ言って再びどこか
へ行ってしまった。

「ちょ、待てよ」

「安心しろ。外野にはいかせん」

なぜか頼もしい言葉だけ残していった。

「……らしいけど、それでいいよな？」

異論がでないので、次へ。

と、そこで。

「各チームの代表はこっちに来い！」

イスカンドルがそう叫んだ。誰も行く気配がないので、士郎はイスカンドルの元へ。

「試合の順番を決める！ 今からじゃんけんをして、上位二組が第一試合、下位二組が第二試合。そして勝者同士が決勝戦だ」

そう短く説明すると、じゃんけんがをした。

士郎はパーで一人勝ちをする。この時点で第一回戦をすることが決まった。

最初の敵は、男子の比率の多いチームだった。

「試合が五回の裏までという点と、ツーアウトで交代という点を除けば通常の野球と変わらん！ 貴様ら、頑張れよ」

そう言われた後、士郎はチームの元へ戻っていった。

「一回戦目だつてさ」

「そう。こっちはポジション決めを終えたわ」

凜がグラウンドにかかれたポジションを指差す。

1、ショート・一成

- 2、キャッチャー・慎二
- 3、ライト・綾子
- 4、ピッチャー・ギルガメッシュ
- 5、ファースト・凜
- 6、レフト・小次郎
- 7、サード・イリヤ
- 8、セカンド・士郎

「……これでいいのか？　つか、センターなし？」

「そこは拙者が。足には自信がある」

「その時は、ショートの俺もカバーはする」

「女子がファーストとサードだぞ？」

「大丈夫よ。安心しなさい」

「いちお、『助っ人』いるし」

「右側女子多いが……」

「私を見くびらないでいただきたい」

「慎二はやつのボール取れるのか？」

「僕を過小評価するな」

どれだけ自信家なんだこいつら、と思わなくもない。

そんなこんなで、不安半分、期待半分で士郎たちの野球は始まったのであった。たたかい

・・・・・・・・・・・・・・・・

試合前のじゃんけんの結果、先攻は士郎たちになった。

「これより、チームA対チームBの試合を始める！」

イスカンドルがそう言って、二チームは左右に分かれていった。

ちなみに、第二試合は校庭を半分にして、向こう側で行われている。

「じゃあ一成、頑張ってくれ」

「ああ……お前にアーチを見せてやるう」

一成は薄く笑うとバットを肩に担いでバッターボックスへ向かった。

「お兄ちゃん。あの人って、運動神経いいほう？」

いつの間にか士郎の膝の上に座っていたイリヤが、見上げながら

尋ねてきた。

士郎は暫し考えた後、

「いちおう、空手は黒帯だったと思う。あと、柳洞寺から学園まで二時間かけて通学しているから、足腰はいいかと」

一成はバッターボックスに立つと、キッとピッチャーを睨んだ。

そして、ピッチャーがモーションに入る。

第一球。

「ストライク！」

——速い。Aチームの全員がそう思った。

真っ直ぐに伸びた球は、とても速かった。一成からしてみれば、因果律が逆転して、投げた途端にキャッチャーのグローブに収まっていたように思えた。

それほど、敵の球は豪速であつた。

キャッチャーから球を投げられたピッチャーは不敵に笑う。

「球速いね……」

「拙者の記憶が確かなら、彼は野球部だったと思う」

「え！？　じゃあ、打つの難しくない？」

「左様だな……」

綾子は少し不安になりつつ、一成を見た。

二球目も、一成はストライクになった。一成は振った方がいいが、掠りもせずに空振り。

「大丈夫か、一成……」

「どうかしら……あ」

凜は何かを思いついたのか、ポンと手を打つ。

「どうした？」

「いいことを思いついたわ。衛宮くんにはできないこと」

「それは？」

「それはね——」

凜は士郎に耳打ちする。吐息がかかって、変な気分になったのは、秘密だ。

三球目はボールだった。一成は振れなかったただけだが、結果的にはラッキーだった。

(くっ……！ 速すぎる！ これじゃあ、衛宮にいいところを見せられない！)

四球目もボール。

(……くそっ！ あんな大口を叩いたのに、これじゃあ……！)

残念そうな士郎の顔と、あざ笑う三大仏敵の顔が頭をよぎる。

「俺には、無理なのか……！」

そして——ピッチャーがモーションに入ったその時。

「一成！ 頑張れ！ 打ったら……えっとなんだっけ？ ……あ、そうそう、俺が弁当作ってやるぞ！」

聞こえたのは、士郎^{てんし}の声。

カキン……！！

地面に平行に打ち返された球は、左中間を抜けた。

まさか打つとは思わなかったのか、敵チームはうろたえながら球を追った。

その間に、一成は走る。そして、二塁に収まった。

「よっしゃー！ ナイスだ一成！」

湧き上がるAチーム。だが、そんな中で怪訝な顔をする者もいた。

「柳洞って、本物なのね……」

「あの生徒会長が……」

「お兄ちゃん、自覚なにのかな……」

女性陣は、ものすごく引いていた。

その後、慎二と綾子は齒も立たず、特に慎二にいたっては、見逃し三振ということによって、凄く責められた。

……主にギルガメッシュに。

「海草……覚えておけよ？」

そう言っつて、ギルガメッシュはマウンドに上がっていった。

「……顔面に球いくかもな」

「もしかしたら、太股にいくかもしれんな……」

「金的の可能性も……」

男性陣はこれから起こるであろう、慎二への制裁を思つて身震いする。

「「「逝つて来い」」」

「物騒なこと言つなよ!!」

そう言つた寸劇の後、各自が定位置についた。

……きつと、ハチャメチャになる。

士郎はそう思いながら、ギルガメツシュを見た。

彼は仁王立ちをしたまま、敵バッターを睨みつけている。手にはグローブをつけていない。

「敵、萎縮してんじやんか……」

ポケモンでいう『いかく』みたいだな、と思う。

ギルガメツシュは、依然球を自分の手に持つことはしなかった。ただただ敵を睨みつけるだけで、モーションに入らない。

「ギルガメツシュ、球！」

慎二はそう言つてから、球をギルガメツシュに投げようとする。

「海草……我がそんなもの、自らの手を使つて投げるわけがなからう……。この腕は、酒と女と戦でしか使わんだ」

学生で酒とか……とは言わなかった。

「でも、それだと始まんないじゃないか」

「海草はただ我^{オレ}の球を取ることをだけを考えている」

「……暴投とか、やめてくれよ？」

そんな慎二の切実な願いに対し、ギルガメッシュはフツと笑い、

「我^{オレ}をなめるなよ？——？アーチャー？である、この我^{オレ}を」

そう、言った。

敵バッターは、自分の目を疑ってしまうような事態が目の前で起きていた。

昨日、夜更かしをしてしまったから、こんなモノを見てしまったのだろうか。

一度視線を地面に落とし、もう一度ギルガメッシュを見つめる。

——やはり、見間違いではない。

ギルガメッシュの背後。その空間が、歪んでいるのだ。

詳しくはよくわからないのだが、そうとしか言いようのない。

彼の背後の空間が、擦れるように歪んでいる。

すると、そこから何か出てきたようだ。よく見ると、それは野球ボールだった。

その球は、何かミミズのような黒い線が走つてある。

「――？王の財宝？！^{ゲイト・オブ・バビロン}！ 受け止めろ、海草！！」

そうギルガメッシュが言い放った途端、現れた白球が弾丸の様な速度で撃ちだされた。

「……はあ？ ……はあ！？」

突如空間が歪み、困惑したバッターの顔を見ながら、慎二は思ったことがあった。

いま、ギルガメッシュの背後で起きている現象……。

あれの正体は、たぶん……いや、きっと『魔術』だ。

魔術師こそいないが、この世界には、確かにそれが存在した。

どうしてそんなものがあるの？ 科学万歳のこの時代に魔術？ 魔術って秘匿するもんじゃないの？ そんなひけらかしていいの？

そんな言葉が飛び交うかもしれないけれど、言えることは一つ。

あるもんはあるんだよ！ と。秘匿、なにそれ美味しいの？
っ
て話である。

そんな公に姿を現した魔術の行使により出現した白球。実に五十を超えている。

慎二目掛けて飛んできた球は、その内の十球だった。

一球でも取れるか、と悩んでいた慎二にとって、これは予期せぬ——
——というか、できるわけない——事態だ。

「う、うわああああ！！」

慎二の悲鳴は、グラウンド中に響き渡った。

球は顔、太股、金的——土郎たちが危惧していた部分、それ以外にもメチャクチャ当たってた。

……これ、再起不能じゃね？

全員にそう思わせたが、慎二はよろよろと起き上がった。

これはもう、慎二は強い子！ と言わざる終えない。

そして慎二は一度息を大きく吸い込んだ。

何かギルガメッシュに文句の一つでもぶつけるのか。

それとも、もうこのポジションやだ！ と不満を吐露するのか。

それとも、世の中の理不尽を嘆くのか。

そんな中、慎二が発した言葉は。

文句でも不満でも嘆きでもなく……

「これ……全部サイン球じゃねえか！！」

『『マジで！？』』

——突っ込みだった。

全員が転がっている球を回収して確認してみた。

松坂、イチロー、松井、ベーブ・ルース、ハンク・アーロン et
c……。

「ふっ……我が宝庫には、陳腐な球など入ってはおらぬ」

「そんな話じゃないだろこれ！」

「これすげえって！」

「売ったら金持ちになるだろ！」

みんながみんな、口々にそう言っでギルガメツシュを讃える。

それより、士郎は言いたいことがあつた。

「慎二、お前はすげえよ！ 半端ない！ お前は今一番輝いてる！！ あんな状況なのに、よく突っ込みをした！ お前のその芸人魂も顔負けな根性に拍手！！」

慎二は親指を突き上げ、フツと笑つた。そして、よろよろと戻つていく。

こんなギルガメツシュの無双状態のため、一回の裏はすぐに終わった。

そして、バッターはギルガメツシュ。応援は送らない。

先ほど送つたら、「黙つていろ雑種どもッ！！」と一喝されたためだ。

「まあ、あやつにいたつて心配なんて杞憂だろうな」

いつの間にか士郎の後ろに立つていたイスカンドルが笑いながらそんなことを呟いた。

「どうしてですか？」

「あやつはアレでも？ 王？ だからな」

正直、士郎には意味がわからなかつた。ただ、イスカンドルは何

かとギルガメッシュの肩を持つことが多い。

二人に何があったのかは、よく知らないが、何かあるのだろうと、士郎は思った。

そんなことを思っていると、ギルガメッシュが？王の財宝？からバットを取り出した。

そのバットにも誰かのサインが書いてある。

「……何て書いてあるんだ？」

士郎は膝の上に乗っているイリヤに尋ねてみた。

イリヤは目を細めてバットの字を見る。

「えーつとねー……『Lou Gehrig』って書いてあるのかな？」

「るー・ゲーリッグ？ 誰だ、それ」

そんな兄妹（姉弟？）の会話を聞いていた慎二が、口を開いた。

「ルー・ゲーリッグ。1923年から39年までニューヨークヤンキースで活躍していたメジャーリーガーだよ。通称、『鉄の馬』アイアンホース。2130試合連続出場で、当時の世界記録を打ち出し、殿堂入りの伝説の人物だ。

当時史上最年少で殿堂入りを果たし、背番号『4』は永久欠番になった。

「言うなればあのバットは？打点王の木棒？！！」
キング・ゲイリッグ

熱弁を振るっている慎二をシカトし、衛宮兄妹はギルガメッシュを見た。

ピッチャーがさきほど変わらぬ速度の豪速球を放つ。

ギルガメッシュはそれに合わせるように慎二いわく？打点王の木棒？
ゲイリッグを振った。
キング・

すると、どうだろう。

白球は、まるで吸い込まれるようにしてバットに直進していく。

そして、バットの芯を捕らえると、鋭角状に飛んでいった。

その球はそのままセンターのセンターの後ろに飛んでいった。

ホームランこそなかったが、ギルガメッシュは二塁に進んだ。

「雑種ども！ 我を返さなければ、命はないぞ！！」
オレ

「まったく、女子相手に無茶言っわね……」

凜ははあ、とため息をついてバットを手に取る。

ちなみにギルガメッシュは？打点王の木棒？
キング・ゲイリッグを回収してから走っていた。

……置いてくればいいのに。

さすがに女子に本気に投げるほど、相手は鬼畜ではないらしい。

綾子はその時と同じような速度で、ピッチャーは球を投げた。

一球目は見逃してアウト。

球の見極め、と言ったところだ。

そして二球目、球は先ほどより少し速い。

その球を見て、凜はフツと笑い、「甘いわね」バットを構える。

すると、バットの後方に一陣の風が吹いた。それにより、バットは女性が振る速度を上回る。

「不自然すぎるぞ、この風!!」

慎二の突っ込みは風に流され、誰にも届かなかった。

風と言う支援をいただいた凜のバットは、球を捕らえ、センターの方へ飛んでいく。

その間に、ギルガメッシュは三塁に、凜は一塁に進む。

（魔術で風を吹かせたけど、勝つためだものね）

負けず嫌いは、魔術を行使する。

「ついに拙者の打順か……」

そう言つと、小次郎は蹲踞を解き、軽くストレッチをする。

「はい、バット」

イリヤは小次郎にバットを渡すが、小次郎は手の平をイリヤに見せ、

「拙者にそれは無用。拙者には……これがある」

そう言つて、小次郎は腰にさした刀を抜いた。

——いや、刀と思われたそれは。

「……え、鉛筆？」

直径三メートルはありそうな鉛筆であつた。

「4 Bだ」

そう付け足したあと、

「では、行ってくる」

小次郎が去つた後、士郎は慎二の元へ駆け寄つた。

「お、おい、慎二！ どうしたんだよ、あれは突っ込む場面だつ

たろ？」

友の身を案じたその言葉に、慎二は自嘲したように笑い、

「……そんなこと言ったら、僕の喉が潰れるよ……」

悲しげに言う慎二。これが突っ込みを背負う者の業か。

小次郎は鉛筆の先端をピッチャーに向けた。

撃たれまくりのピッチャーは鬱憤を晴らすように、今までで最高速度の球を放った。

「——見切ったア!!」

そう言ったものの、球はピッチャーに向かって進んでいった。

ピッチャーは安心したようにグローブを球の進行方向に向ける。

が。

——スウ。

「……え？」

グローブで何かを掴んだ、という感じがしない。タイミングも位置もぴったりだったのに。

恐る恐る、グローブを開いて見るが、そこに白球の姿はない。

「なッ!？」

慌てて後ろを振り向く。その光景は、ピッチャーを驚かせるには十分だった。

球が、割れていた。綺麗に。真っ二つに。

そんな驚愕の光景の中、小次郎の唇は吊り上っていた。

「これが本当のサムライドライブ」

驚愕している土郎の横で、プルプル震えている慎二が大きく息を吸い込んだ。

そして……。

「それって……テニスの王。様のリョ。マくんの技じゃねえか!」

慎二は咳き込んで座る。そんな慎二をよそに、

「アウトー」

「なあ!？ なぜ!？」

審判の言葉に、小次郎は信じられないと抗議する。

「球斬るとか、非常識すぎる」

「今まで魔術をのさばらせておいてこれかよ！」

慎二の変わりに、士郎が突っ込む。

「無念なり……」

「お前も引き下がるの速いな!？」

気がつけば、ギルガメッシュの背後が荒々しくなっている。

イスカンドルに落ち着かせてもらって、イリヤが打席に向かった。

「心配だなあ」

「安心してよ、お兄ちゃん。私は『代打』を用意したから」

「代打？」

そんなのどこに？ 士郎が辺りを見渡すが、そんな者は見当たらない。

「そんなのどこ——っ!？」

イリヤに向き直った士郎は、自分が何かの影にいることに気がついた。

そこには、巨大なモノ。イスカンドルよりも巨大なそれは、イリヤを肩に担いでいた。

半裸の巨軀は、微動だにせず、立っている、というより、建っているといった感じだ。

「な、なんだよ、これは!？」

「それじゃ、いこつか」

イリヤがその巨軀に指示を出すと、それはのしのとバッターボックスに立つ。

「収まってないじゃんか！」

余裕でベースを踏んでいた。審判は「ちょっと下がろう」と指示し、大男は半歩下がる。

そしてバットを持つ——というか掴む、と言ったほうがしっくりくる。

バットより、彼の指の方が頼もしい。

とにかく、バットを掴みあげると、構える。

敵は明らかに怯えていて、投げる球は凄くぶれていた。

「やっちゃえ、バーサーカー!!」

イリヤにバーサーカーと呼ばれた大男は声にならない声を上げてバットを振った。

球はバットには当たらず、小指に当たり飛んで行った。

球はぐんぐん伸び、校庭を超え、やがて見えなくなった。

——いわゆる、ホームランである。

「おおー!!」

「凄いな!!」

Aチームが歓喜するなか、ギルガメッシュが悠長に歩きながら戻ってきた。

「讚えよ。王の凱旋だ」

ご機嫌取りをするため、とりあえず拍手を送る。

ついで凜、イリヤ&バーサーカーが戻ってきた。

「これで一気に引き離れたな!!」

「次はお兄ちゃんの番だよ!!」

「波に乗って、かつ飛ばしなさい」

「おう、任せろ!!」

士郎は験担ぎの意味を込めて、バーサーカーの使ったバットで挑む。

もう、ピッチャーの顔は蒼白していた。

これだけボコスカ打たれ、目を疑うような、魔法のような現象が数多く起こっているのだ。

当然と言えば当然だろう。

（敵には悪い、俺も使わせてもらっぜ）

彼が切嗣から教わったものは、小学生の算数以外に、もう一つあった。

それが？強化？。

物質に魔術を通すことで、その物質を文字通り『強化』する魔術だ。

バッテリーボックスに立った士郎は、？強化？をするために必要な、物質の理解をするために目を瞑る。

トレース・オン
同調開始！

そう念じると、バットと自分が繋がるような、なんとも形容し難い状態になる。

物体を理解する必要性とは、魔術を流し込む隙間を探るためだ。

「ストライク」

もし、しくじれば、それは崩壊を始めてしまい、強化どころか弱
化してしまう。

じわり、と背中に嫌な汗が流れる。

つーつと伝う感覚は、耐え難いものがある。

だが、集中をとぎらせてはならない。

「ボール」

——集中だ。

外界の喧騒が、だんだんと遠ざかっていくのを感じる。

バットを握る手に、少し力が入る。

半分ほど理解ができたころだろうか、汗は全身にかいていた。

「ストライクツー」

理解はほぼ完璧だ。

残すは、魔術を慎重に流し込み、物質を確実に強化するだけだ。

あと、ひとふんばりだ。

バットを握る手に力を込め、魔術を流しだす。

隙間に。空白がなくなるように。満タンにしていく。

——できた。

士郎は目を見開き、相手ピッチャーを射抜く。

「さあ、来いやあああ!!」

ぱしっ。

「ストライクスリー。チェンジ!」

「……へ? な、なんでさ」

「目なんか瞑っているから」

審判は辛辣な台詞を士郎に放った。

「そんな……。——うつ!？」

全身びっしょりの士郎は、背後からただならぬ殺気を感じて振り返ってみる。

そこには、確かに鬼がいた。

「う、うわあああああ!!」

血の雨が降る中、試合は二回の裏へ。

いちのちゅう（後書き）

……いかがでしたか？

これから先、ずっとこんな感じで進みます。

もし「なんか考えてたんと違う！」と思われた方、もうしわけありません。

もし、まだ読み続けてくれる方。

申し訳ありませんが、先に書いたように更新が滞る可能性があります。

長い目で見てください、ありがたいです。

……どうでもいい話ですけど。

？打点王の木棒？の『木棒』とは、

木の棒でバットと言う意味と『希望』をかけたものです。

……………。

しょーもない

（ゝ・A・ゝ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8666u/>

第五次受験戦争

2011年10月8日18時40分発行